

安里咲

NOT FOR
PUBLIC RELEASE

2

異国の城で拷問人形
となるのです。

〈亜由美シリーズ 6 作目〉

あんぱらぐど著 荒縄工房

S M 小説 亜由美シリーズ

安里咲 2

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行



**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**



**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はとっていません。

あんぷらぐど

NOT FOR PUBLIC RELEASE

S M雑誌に「仲ゆうじ」名で小説を執筆して作家活動をスタート。その後、作家活動は休止し、編集仕事に携わる。ネットでは「ふにやふにや」「あんぷらぐど」名でS M小説を執筆。独自の自虐的S M、一人称による告白形式の作品、伝奇S M小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

噴水	137
水槽	125
ベタベタドロドロ	14
残酷な午後	91
バーゲン	65
見世物	50
バザー	37
実験材料	13
主な登場人物	10
はじめに	8

**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**

離陸	375	シヤンデリア	295	悪夢	270	羞恥	250	講義	230	エロ人形	212	奉仕の夜	189	綱渡り	163
		狂乱	334												
		膾張	354												

NOT FOR PUBLIC RELEASE

	城の中	紳士淑女	奴隷の姿	拷問ショー	惨劇	ギロチン	エンディング	奥付
	3	4	4	4	4	4	5	5
	9	1	4	4	6	9	3	3
	5	8	0	5	3	0	1	1

NOT FOR PUBLIC RELEASE

はじめに

本書は、亜由美シリーズの「第3冊」に登場した安里咲を主人公とした作品の完結編です。「亜由美シリーズと同じ世界観で描かれています。

前作『安里咲1』に引き続き、楽しみいただければ幸いです。前作のあらすじは

剛介たちに強姦、そして輪姦された安里咲は、女子寮に監禁される。末土教授の妻である陽子夫人、寮長の渡辺奈美、亜由美の動画を気に入つてゲー研に入つたという彩芽によって、屈辱的な調教がはじまる。朝から深夜まで、ありとあらゆる恥辱を受ける。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

さらに屈辱を浴びせる。一緒に亜由美の実験に参加した登美子、佐智子、映奈に貸し出されたのだ。

亜由美シリーズ

- 1、小説『亜由美』第一部
- 2、小説『亜由美』第二部
- 3、小説『亜由美』第三部
- 4、『亜由美』灼熱編
- 5、『安里咲』1
- 6、『安里咲』2（本書）
- 7、『亜由美』降臨編（予定）

NOT FOR PUBLIC RELEASE

主な登場人物

わたし（安里咲）

亜由美

と同じ大学の新生。亜由

美の拷問実験に参加し

登美子

佐智子

映奈

田美の拷問実験に参加した

女子大生。

剛介

亜由美が憧れた先輩。

「亜由美の会」をつくる。

末土教授

亜由美に興味を持ち、拷問実験を企画して

NOT FOR PUBLIC RELEASE

実施。

野川陽子

末土教授の

大人

事実婚。

渡辺奈美

女子寮の寮

長

木道経験者。

三上彩芽

あやめ

ゲー研初の

女性

部員。

女子寮に住む。

寮長

の助手的存在。

珠緒

かつての安里咲のバレエ教室の友人

ミハイル・マーコフ

ロシア系のバレエ教師。

安里咲

NOT FOR PUBLIC RELEASE

の初恋の男。

ゲー研 大学のサークル
ムをつくった。

**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**

剛介の提案で亜由美のゲー

実験材料

ギロチンのような枷
向くこともできない。
る。なにをされても拒
と両手首を固定され、振り
を彼女たちに突き出して
けない。

冷たい道具が粘膜に
つけられた。

「はああああ、もう、
計してくください」

悲しいほどわたしは弱い存在になっていた。登美子、
佐智子、映奈……。同じ大学の学生で、ただ末土教授
の講義を受けただけ。亜由美の実験に参加しただけな
のに。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

いまはわたしを責めることに夢中になっている……。
「いやらしい声を出してやめろってことは、やれっ
てことなのよ、こいつ
登美子はリーダー気
「マゾってそうなんで
もね」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

映奈。かわいいクセにブルイ女。
「イヤよイヤよは、いいのうちにちってね」
佐智子も自分だけいい子になりたいタイプ。
笑い声もだんだん甲高くなっていく。
ぐいっと太いデイルドが入ってきた。

「うぎっ、もう、やめてください」

またなのか。

剛介たちに犯されてか、
性器や器具でえぐられ
望。もういやだ。やめ
そこは休む間もなく、男
死にたいほどの絶
殺してほしい。

「あつ、くうううう」

誰が操作しているのか
人の気持ちをはかっているかのように動く。

それは痛いだけ、苦しいだけではない。熱くなつて
いく。

「あらあ、こんなに垂らして……」



指ですくって、それを燃え上がるお尻になすりつける。

「いい思いをさせるなんて、悔しいわ」

「じゃ、こいつのオツツも叩いてやれば？」

爪を乳首に立てて、
お尻の穴に突かれた。

「ぎいいいつ」

そして爪で弾かれる。

「うっ」

「感じなさいよ、変態」

哀しく、恥ずかしく、死にたい気分になる。
何度も弾く。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「乳首も固くしちやつてさ」

乱暴に乳房を揉まれるのがわかる。彼女たしの爪が食い込む。たしかに乳首がしこつていい爪が食い込む。

「お尻の穴もまる見えぢずかしいわ」

「ねえ、まさか、逝くはないでしょうね」

「いくらなんでも恥ずすぎるわ。こんなことで、

感じてるなんて異常すぎる

「逝ったら許さないわよ」

「ああ、そんな……」

苦痛が快楽に直結するように寮長たちから厳しく訓練され続けて、体が慣らされてきた。この絶望から逃

NOT FOR PUBLIC RELEASE

れることができないのは、脳が溶け出すほどの快樂しかない。せめてそこに逃げ込ませてほしい。

脳内物質が誤作動して苦しみから逃避させてくれる。それを否定することもできない。中毒のように求めてしまう。

「逝くなよー」と言いながらその手は止まらない。熱く、激しく動かされ、乳首への執拗な攻撃も続いた。

「逝くうー」

「ダメよ。許さない」

「でも、でも……」

ふいに動きが止まった。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「え？」

「生殺しってやつよ」

「ああん、ひどい」

登美子も佐智子も、

ような目つきだ。あれ

女たちにとっては、愉

教授はある意味で実験

実験だったように見えて

る実験だったのだ。

安全で自分には責任のない「実験」という名目を与

えられ、自分の中に潜む恐ろしい欲望のままに行動し、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

も、あの拷問実験のときの残酷なことが、いまや彼女たちになつていく……。

成功した。亜由美に対するあれは実験をする者に対する

そこからわずかなバイト代とは比べられないほどの快楽が得られることを知ってしまった……。

亜由美は海外へ留学して、木土教授はここに残った。もし亜由美に対する実験は、彼女を追跡調査したいに違いない。だが、それはしなかった。むしろわたしを捕まえて地獄に落とすはかの三人たちの前に奴隷として差し出した。

実験はまだ続いているのだ。

わたしたち四人がこのあと、どんな人間になっていくのか。なにをし、なにを感じるのか。教授はそれを観察したいに違いない。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

うずく股間。もう少しで快樂の強烈な波がやってこようというのに、すべて動きが止められてじらされる。

「ど、どうすればいいですか。どうすれば、してくれるんですか」

思わずわたしはそう叫んでいた。

「安里咲。ホントにホントの淫乱牝奴隷になったの？」

友人と思っていた人たちから、そんな言葉を聞かされるとは。

「は、はい。安里咲は、淫乱な牝奴隷です。だから、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

お願いです。ください」

「だめだめ。そんなのウカもしれないじゃない？

演技でしょ？」

「どうして……。こんな演技、するはずないです」

「わからないわ。あなたただ快樂がほしいだけで、

こんなことをしているのか、信じられないもの。これ

もあの教授の計略なんじゃない？」

「カメラがあるかもよ」

彼女たちは壁や天井を見回している。

たしかに、それはあるかもしれない。だとすれば、

巧妙に仕掛けられているはずで、簡単には見破れない

NOT FOR PUBLIC RELEASE

だろう。

わたしの部屋を明け渡すことは、そういう意味もあったのかもしれない。

そして三人の共同の部屋にするつもりも。

もうこれ以上の地獄はないと思っていたのに、まだまだ先があるとは。

「お願い。安里咲にちよんを返して欲しい」

「なにを？」

「その太い棒を入れて！」

「まあ、はしたないわ。安里咲、それでも女子大生？」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「お願いします」

「こうしてあげようか」
「ぐいっとデイルドが突込まれた。」

「ふうっ」

冷めかけていた熱が再び上昇していく。

「かわいそうだから、あげてもいいけど……」

「ああん、お願い、続けてください」

「じゃあ、安里咲。これからわたしたちの言うことをなんでも聞く？」

「はい」

「おもしろいわ。逝ってもいいわよ」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

あそこがメチヤクチヤになるほど、彼女たちは激しく動かす。

「あん、あん、あん、もっく、もつと……」

わたしは絶望の海に這い上がった。やっとなんか浮かんだ快樂のボートとができる……。

「はい、おしまい」

「あうううう」

そこでやめるなんて。

「お、お願い、続けてください、お願いだから……」

「さあ、どうかしら。なんでわたしたちが安里咲を気

NOT FOR PUBLIC RELEASE

持ちよくさせないといけないのかなあ」

「そんなこと言わないで……」

「だつてさ。つまらないもの」

「うううう、お願いい殺してええ」

「なに言ってるのよ。談しやないわ」

もう少しで到達しそつたのに。あまりにも無慈

悲だ。もしこのままだとしたら、わたしはおかしくな

つてしまう。

「安里咲はわたしたちになにをしてくれるの？」

「なんでもしますから」

「それはもう、聞いたわよ。そうじゃなくて、わたし

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「たちを気持ちよくさせてくれる？」

「ああ、どんなことでもやらせます」

寮生のみんなの足を舐めたのだから。この中途半端な快楽の解決のためには、どんなことでもする覚悟があった。

「じゃあ。舐めてもらいたいな」

それぐらいのことは

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「どうぞ、お願いします。舐めさせてください」

「そこまで言うなら」

佐智子が恥ずかしげもなく、スカートをたくしあげてパンティを見せる。ぐっしより濡れている。はした

ない女。わたしをいじめて感じている。拷問実験でも感じていたのかもしれない。そして彼女はその手、深股間を逃げることで、いわたしの顔に押しつ、舌を伸ばして舐める。牝のニオイ。牝の味。

「ちやんとやってよ」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ぐいっと強く押しつけてきた。鼻から口までが彼女のもので埋まる。必死で舐め回す。それにガマンできないのか、彼女自身が回すように股間を動かす。

やっとわたしの中のオモチヤも動きを再開した。

「ほうほう」

声が出てしまう。

「こいつ、マジで盛り上げてるわ」

「しようがないじゃない。八好きなんだもの」

「次はわたしよ」

佐智子がどれぐらい寺らがよくなったのかはよく

わからないが、映奈に。彼女の股間はむだ毛を

形よく処理していて、白肌に美しいピンク色だった

が、格別おいしいわけでもなく、濡れ方こそ浅いが、

ニオイはやはり牝でしかない。

それをおいしそうにわたしはしゃぶってみせる。

するとぐいぐいと股間をデイルドが突き上げてきて、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

また強烈なエクスタシーへの扉が開いていく。

むせそうになるが、必死にがまんして、このチャンスを逃したらまたお預け食らうかもしれないという恐怖と戦う。もうやめなさい。最後までしてほしい。逝かせてほしい。

「けっこう上手じゃないか、ここで習ったの？」

「必死なのよ。あれなしで、生きていけないんだもの」

登美子に代わった。いまわたしを突いているのは佐智子だ。憎しみをぶつけるかののように、乱暴にえぐる。同じ女なら、どうすればいいかわかりそうなものだが、

NOT FOR PUBLIC RELEASE

あえて苦痛を与えようとしているのかもしれない。

以前のわたしなら、こんな状態で濡れたりほしくないし、燃えたりもしない。けど、そういう人間ではなくなっている。苦痛も、わたしには大切な生きるための燃料。もし彼がそれを知っていて乱暴にしているのだとしたら、業界の加虐趣味の持ち主なのかもしれない。

「見て、すごいことになってる」

彼女はわたしの穴を映奈に見せている。デイルドをムリな角度にすると、パツクリと開いてしまう。

「うわ、いやらしすぎるわ」

NOT FOR PUBLIC RELEASE

「グロテスクよね」

自分たちとは違うとで
違わないのに。言うのだろうか。それほど

登美子は逝きそうに
ぶつけるようにしてく
ている。腰を前後に動かし、

鼻が潰れてしまおうが
けるのだから。にしも必死だ。もうすぐ逝

後方の二人がすりこきでも扱おうように大きくまわし
はじめたので、わたしは突然、たまらなくなり、頭を
殴られたような衝撃を受けながら、強烈な陶酔の世界
に入ってしまった。

**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**

舌と唇で登美子を求めているものの、力はうまく入らない。

それでも登美子は気持ちいらいしく、大量の液を噴き出しながら、硬直

「がふふうう」

満足できる時間は思ほど長くはなかつたが、やつとそこまですぐに満足された。

「はー、はー、はー」

荒い息をつく。

「安里咲。よかったわよ」
登美子が誉めてくれた。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

なんだから、いままでの悔しさよりも、うれしさがこ
み上げてきてしまった。長や彩芽よりもむしろ素直
に喜べてしまう。あれがあった抵抗が消えている。
彼女たちもわたしと同
あつた抵抗が消えてい
こわかったからだ。

この三人とも、いず
たしのようにされるのでは
ないか。

きつとそうなるだろ
う。木土教授の実験は成功する。
たった一人だけだった
亜由美から、その四倍に増殖し
たのだから。

とんでもないものを植
え付けられたことに、ま
だ三人は気付いていない。
そのうち、泣き叫びな
がら思い

NOT FOR PUBLIC RELEASE

知るだろう。

だからといって、わたしは変態世界へ。ようこそ、意識が遠くなってきたわたしのあそこで遊んが、こうして終わってえられない。未来のこと、傷口が大きくなっていきうだろう。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

は同情はしない。ようこそ、痛が生み出す地獄の快樂へ。貧血のようだ。彼女たちは。あまりにも激しい一日。明日のことなど、一切考いつか心は破裂してしま

「時間よ」

寮長がやってきた。

ぼんやりと彼女を見上げる。

「まったく、だらしがなわね。片付けて背負って降りなさい。あんたの寝木はわかかってるんでしょ」

そう。わたしにはな自由もないのだ。

「はい。寮長様。ありがとうございます」

泣きながら礼を言いつつ寝を外してもらった。

「これは入れたままでいいなさい」

太いデイルドが突き刺さったまま、片付けさせられた。

ニヤニヤしている三人。いずれあなたたちも、という気持ちが顔に出ないように我慢した。

バザー

商店街の一角。空き占舗を使ったバザー会場。

わたしは朝からそこ
うスケジュールになる
とが待ち受けているの
「納戸の中でよく眠れたら、
当然、それよりも厳しいこ

登美子たちも来ている。彩芽はわたしの首輪の鎖を

握っている。

「すごいじゃない」

段ボールに服、靴、下着、文具、本などが入ってい

NOT FOR PUBLIC RELEASE

る。すべてわたしのものだ。これから、それを売りさばくという。

「見て！」

彩芽が、登美子たちと生に壁に貼ったパソコンで作ったらしいプリントをワラを見せる。

「安里咲の私物オークション」と大きな文字。

「売り切れるまでガンバカンパ！ 貧しい安里咲におめぐみくださいませ 購入いただいた方には大サー

ビス。体を張ってご満足いただくまで奉仕」

そんな文字がやや小さめに表示されている。

「服はそのあたりに吊しましょう」

わたしには触らせず、ピンクの下着や、縞柄のソックス、花柄のワンピースなどを壁にハンガーで吊していく。

とくに下着はこれみもせず、壁にピンで広げて展示される。

みんな服を着ているわたしだけが全裸だ。自分の服や下着が恥ずかしがらぬ、二束三文で売り飛ばされていくのを止めることもできない。

「おはようございます」と男たちがやってくる。

女子にいたぶられ続けていたせい、久しぶりの男子に脅える。裸で首輪という姿を見られたくない。

NOT FOR PUBLIC RELEASE

女子寮からここまで、犬のように練り歩かされたの
だが、それでもこうして
上げてくる。

「安里咲！ 隠すんじ
わよ！」

寮長が怒鳴り、胸を
腕を激しく叩かれた。

「すみません！」

「きをつけ！」

「はい」

手足の拘束は免れている。傷や痣あざが明るい光に照ら
されてみつともない。

「この仕切り、持ってきたんだけど」

**NOT FOR
PUBLIC RELEASE**

ゲー研の連中がベニア板を持って来ていた。学園祭で使ったらしい、ゲームキャラクターである派手な髪の毛の色をした女子のイラストが入った立て看板。それを奥の方に設置する。

その向こうに、わたしが使っていた布団が広げられている。

なにをさせられるかはわかっていない。しかし、あからさまにその場所が作られると、吐きそうになってしまった。

「九時にオープンですからね！ 急いで！」
そして彩芽は、ゲー研が持って来た体操着とブルマ

NOT FOR PUBLIC RELEASE

を寄こした。

「着なさい。少しはいいやない？ お客さんを楽ダメよ。安里咲、笑っ

白い上着。紺のブル一度もこうした昔のかめてのことだった。

いずれもサイズが小さく

「いいわ。エロい！」

着たら、さらに恥ずかしい。

「あなたが、余計なこと言わないように、これもつけ

NOT FOR PUBLIC RELEASE

マニアが好きそうな衣装。うはしたことがなく、はじませなくちやね。暗い顔は

ピチピチになってしまう。

ましようね」

開口器。言葉を発せな
いて、口の中を自由に
拘束されていなくて
抵抗すれば拘束されて
見渡しても誰一人、
ない。楽しそうに準備
ゲー研の立て看板の横
彩芽たちは打ち合わせ
させられるのかはわか
たちやゲー研の連中が
和気あいあいと準備を

NOT FOR PUBLIC RELEASE

ようにしたいのだ。それ
わたしはそれを受け入れ
らに痛い思いをするから
しを助けようとは思って
いる。

ゲー研の立て看板の横につな

ながれた。
なにをするのか、
ながら登美子
始めた。

細長い集会用のテーブルが並ぶ。パイプイスも用意されて会計役の寮生が座る。もう一つのテーブルは空。見たくないものが並べられる。へらへらした小柄の中年男がそこにいた。

「この商店街に薬局があるんだけど、そこの店主の兄が隣町でアダルトシヨをやってるんだ」

ふいに話しかけてきた男。剛介だった。

「元気だった？」

引っぱたきたくなる。おまえのせいで、亜由美もわたしも、人生が台無しになっていく。

手を上げようとしたのに、彼がやすやすと掴んで離

NOT FOR PUBLIC RELEASE

奥付

お読みいただき、ありがとうございます。

二〇一四年八月 第一版
二〇一六年十月 第二版

著作権 あんぷらぐど
(荒縄工房)

荒縄工房の情報は下記サイトへ
● ブログ「荒縄工房」
ホームページ

● 荒縄工房 S M 研究室
● 今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。

NOT FOR PUBLIC RELEASE